

投資は必要なものなのか？

投資は、必要不可欠
というわけではない

投資は誰にとっても必要なものですか？

このように質問されたら「いいえ。必要というわけではありません。有利だと思っ人がやればいいのです」と筆者なら答える。

冷たい答え、或いはやる気の無い答えだと思われるかも知れないが、こう答えるのが適切だ。

寿命が延びていること、高齢者が増える一方で社会保障の支え手となる若い人が減っていること、日本の経済が停滞気味なことなど、手持ちのお金を増やしたくなる不安要因には事欠かないが、「投資をしなければ、大変なことになる」と脅かすことにより投資を促すのは間違っている。

投資は「絶対に」お金を増やしてくれるといえる行為ではない。老後のお金が尽きないように備える手段として「投資」を割

り当てるのは不適切なのだ。

老後のお金が足りなくならないようにするために割り当てるべき手段は、現役時代の計画的な貯蓄と、リタイア後にあつては計画的な資産の取り崩しだ。

もちろん、貯蓄に回すお金を投資に回すのは構わないし、筆者自身は投資をお勧めしたいと思っている。

気をつけるべきなのは、将来投資で儲かることを当て込んで、お金を使いすぎてしまうことだ。企業年金のような主体と異なり、個人の場合、将来お金が足りなくなった場合に、不足額を補填してくれる誰かがいるわけではない（企業年金の場合は母体企業が積立金の不足を補填する仕組みがある）。

将来のお金の不安に備える手段は、あくまでも計画的なお金の管理なのだ。

投資は、それが有利だと思っ人がやればいい。損をするかも知れないリスクを負ってまで投資をするのは嫌だと思っ人は、無理



経済評論家
山崎 元

に投資しなくていい。

他人の不安を煽って、投資しなければならぬというのとは良くない。しかし、老後の不安を煽って投資商品を勧めるのは、金融機関のマーケティングの常道だ。「人生100年時代」という言葉には注意が必要だ。実は、不安を喚起して商品を買わせるのは、世間でよく使われる手法なのだ。薬品、健康食品、生命保険、果ては霊感商法など例が多い。手数料が高くて不適切な商品は少なくない。脅す人には気をつけよう。

投資はお金を、働かせる

投資は、お金を働かせることだ。働かすにお金を稼ぐのではない。投資について、働かすにお金がお金を稼ぐ行為なので、好きになれないという人が時々いる。好き嫌いは個人の問題なのだが、これは残念な考えだ。



>>> 45歳・投資経験ゼロからの老後資金のつくり方

投資されたお金は、たとえば株式投資なら、企業が生産活動を行うための「資本」として経済に参加して働いている。決して「働かずに稼ぐ」のではない。自分自身が働いて稼ぐことは立派な行為だが、持っているお金にも同時に無駄なく働いてもらうと考えるといい。

資本は、製造設備であったり、原材料費だったり、研究開発費だったり、さまざまな形で使われて、利益を上げることが期待される。株式に投資している状態は、この資本の一部を提供して持っている状態だ。**働いている資本を「持っている」状態こそが投資なのだ**という理解をしつかりと持つことが大切だ。投資と言うと、株式などを売り買いすることだと連想する人が少なくないが、売り買い自体が投資なのではない。また、過剰な売り買いは余計な手数料や税金の支払いにつながり、投資のパフォーマンスを損なう原因になる。

「安く買って」「高く売る」ことができる確かに儲かるのだが、大きな規模で儲けるためには、時間をかけることが結局効率的なのだ。企業の株式に投資するとしても、企業に利益を稼ぐための時間を与えなければ上手く行かないことは自明だろう。

では、仮に株式に投資するとして、どれくらい儲けられるものなのだろうか。株式の期待投資利回りがどれくらいのものなのかについては諸説あるが、年金基金や信託銀行といったプロの投資家が想定している

期待利回りは、長期国債の利回りに5%程度を足したくらいのものだ。現在、国債利回りは0%前後なので、年率5%程度ということになる。

5%というと「低いなあ」と思うかも知れないが、年率5%で資産が14年間増え続けると運用元本は約2倍になる計算だ。

現在、「元本割れする心配なしに得られる利回りはほぼ0%で、株式に投資してもせいぜい5%くらいの利回りだ」というレベル感は覚えておくと良い。

例えば、昔の預金金利を覚えている高齢者などに、2%〜3%といった利回りは、工夫すると大きなリスク無しに得られる「欲張っていない」利回り目標だと思う人が少なくないが、現在においてこのレベルを目指すには、株式に半分程度投資するくらいのリスクを取らなければならないのであって、相応のリスクを覚悟すべき利回り目標だ。

また、クレジットカードのリボ払いやカードローンでお金を借りる際の金利は15%程度が多いが、株式投資で得られる利回りの3倍もの金利を支払うのだから、大いに不利だと認識する必要がある。

リスクは必ずつきまとう

さて、世の中の金利がほぼゼロの時に年率5%の利回りが期待できるとは悪くない話だが、株式投資には「リスク」が必ずつ

きまとう。

投資の場合、リスクは収益率の変動の程度で表すが、一般的なリスクから計算される損失の可能性は、何百銘柄にも分散投資した投資信託で株式に投資した場合には1年後に投資額の3分の1を損するくらい、個別の1銘柄だけに投資する場合、銘柄にもよるが7割くらいの損を覚悟しておかなければならないくらいだ、と考えておくといい。

分散投資している場合でも、1000万円投資しているとすると、ひどく運の悪い場合には(100年に2、3度あるくらいの不運で)、333万円損をするかも知れないという状況は気分のいいものではない。但し、同じくらいの確率で年間に4割くらい儲かる場合があるということも覚えておこう。先に挙げた期待利回りの「年率5%」は、こうしたケースを含む様々な場合を平均して得られるだろうと想定される利回りだ。

投資を勧める人の中には、株式は長期で持つなら絶対に儲かると言いたがる人がいるが、これは不適切だ。長期がどれくらいの期間を指すかにもよるのだが、仮に20年だとすると、過去100年のデータを見ると、20年というサンプルはたったの5個しかない。過去のデータは、株式が将来大丈夫なこと証明には全くならない。

それに、そもそも、「絶対に大丈夫だ」と株式市場に関わる人が皆思うようになると、投資して高い利回りが得られるような

まとめ

- 投資は有利だと思う人がやればいい。
- 投資をしなくても、大変なことになる。
- 老後のお金が足りなくならないようにするために割り当てるべき手段は
 - ① 現役時代の計画的な貯蓄
 - ② リタイア後には計画的な資産の取り崩し
- プロの投資家が想定している期待利回りは、現在、年率5%程度。
- 過去のデータは、株式が将来大丈夫なことの証明には全くならない。
- 一般的なリスクから計算される損失の可能性は、何百銘柄にも分散投資した投資信託で株式に投資した場合には1年後に投資額の3分の1を損するくらい、個別の1銘柄だけに投資する場合、銘柄にもよるが7割くらいの損を覚悟。
- 「損を想像する時の嫌な感じ」を人々が持たなくなってしまうと、投資は儲からない(リスク・プレミアムが生じない)ものになるはず。
- 「ゼロサムゲーム的な」状況は、長期的な資産形成には不利。長期的な資産形成に向いているのは投資のリスク。

株価よりも、遙かに高い株価が形成されてしまつて、株式投資は儲からないものになつてしまうはずだ。1980年代の後半に、日本では株価や地価が高騰する「バブル」を経験したが、この時に起きたことの一部分はこの原理で説明できる。

理屈っぽくなつて恐縮だが、株式のような「資本」に資金を投じる際、資本市場では資本にリスクに見合つた追加的な利回り(「リスク・プレミアム」と呼ばれる)が得られるような価格が形成されると期待できる。これこそが、投資は儲かると考えられる理由であつて、「損を想像する時の嫌

な感じ」を人々が持たなくなつてしまうと、投資は儲からない(リスク・プレミアムが生じない)ものになるはずだ。投資にリスクはつきものなのだ。

だから、「投資はそれが有利だと思う人がやればいい」という以上のことは言えない。

投資と投機のちがひ

リスクがあるから、追加的なリターンが得られると書いたが、価格に変動のあるものの全てで高いリターンが期待できるわけではない。

例えば、FX(外国為替証拠金取引)や外貨預金には為替レートの変動リスクがあるが、このリスクは「ドルを買って円を売っている人」と「円を買ってドルを売っている人」の両方が負担しているものの、両者の損益の合計がゼロになるような「ゼロサムゲーム的な」状況だ。この場合、リスクを負担しても追加的なリターンは期待できない。FXや外貨預金をやるなどと言わないが、長期的な資産形成には不利だと申し上げておく。

自分のお金をリスクに晒す場合でも、株式、債券、不動産のように「資本」に資金を提供する場合の「投資のリスク」と、FX、商品先物取引、金、外貨預金などのゼロサムゲーム的な状況に参加する「投機のリスク」とを区別して考える必要がある。

長期的な資産形成に向いているのは投資のリスクの方だ。多くの個人にとつては、株式に投資するのが手がけやすく現実的だ。先に述べたようにリスクについて考えるなら、十分に分散投資された株式投資を行うのがいい。具体的には、世界の株式の株価指数に連動するインデックス・ファンドと呼ばれる商品に投資するのがいいのだが、その理由は次回の本連載で詳しく説明する。

投資できるまとまったお金がない方は、毎月一定額の積み立て投資から始めるといい。ほどなく「まとまったお金」になつて、働いてくれるだろう。